



山越阿弥陀図（国宝）

「称名しちみょうの時に心こころに思おもふべきやうは、
人のひぎなどを引き働はたらかして、『や、
助たすけたまへ。』といふ定じやうなるべし。」

——法然上人御法語より——

「小言念仏こごんねんぶつ」という題の落語
があります。一家のあるじがお
仏壇に向つて殊勝げにお念仏を
申すのは良いのですが、お念仏
は口だけで、相間相間に使用人
を叱りとばし、家人に小言を言
い……。こんなお念仏では意味
がありません。

人のひぎにとりすがつて、「や
あ、助けて下さい」と呼ぶよう
に申すものだと説いておられま
す。イスラム教徒がメッカに向
つて礼拝するときには、全身を
大地にひれ伏します。私たちも
心の中ではこの姿と同じ気持ちに
なつて、自分の全てを投げすて、
阿弥陀様におすがりするつもり
で、念仏を申したいものです。

みかえり 第7号



釈迦三尊図(狩野元信筆)重文

智者^{ちや}のふるまいをせずして、
ただ一向^{いっこう}に念佛^{ねんぶつ}すべし。

——法然上人御法語より——

現在私たちの身の回りには、知識を得るものが
沢山あります。新聞・テレビ・ラジオ、そして学
校・会社等、色々などところから知識を得ています。
しかし私たちがいくら博学ぶったとしても、それ
は一階から高層ビルの屋上に上って太陽に近づい
たと思つてゐる程のことでありましょう。現に私
たちは罪惡生死^{ざいごくしじ}の凡夫なのです。私たちの救われ
る道は、愚鈍の身になって阿弥陀仏にすがる他な
いのです。勿論、現在までに得た知識を全て捨て
去ることはできません。愚鈍の身になるとは、自
分独人では何もできない、何の力もないことを腹
の底から知らされることです。
何の力もないこの私を救つて下さるのが阿弥陀
仏です。そこに阿弥陀仏への感謝の氣持としてほ
とばしり出るのが「南無阿弥陀仏」のお念仏なの
です。

総本山 永観堂禪林寺



釈迦像

道心の有無を論ぜず、造罪の軽重をいわず。
ただ本願の稱名を念々相續せん力によりてぞ
往生は遂ぐべきと思ふときに、他力本願に乗
ずるなり。

——法然上人御法語より——

阿弥陀仏の本願というのは、我々の思議では到底おしはかることの出来ないほど廣大深遠な、それ程に特別な意から発されています。それは、阿弥陀仏が自身の正覺に我々衆生の往生を賭けておられるからです。しかるに我々は現に阿弥陀仏という名を聞いて知っています。ということは、もはや我々の往生は我々自身が知らなくても、阿弥陀仏によつて先取りされてあるということに他なりません。我々の側から付け加えるものなど一つもないのです。これが他力ということであり、南無阿弥陀仏の六字の名号の意味です。

自分の力を頼りとして往生するものではありません。他力の名号によつて往生させて頂くのです。浄土の教えはこれに尽きております。



釈迦十大弟子図

かなしきかな、かなしきかな、いかが
せむ、いかがせむ。我^{われ}らがごときはす
でに戒^{かい}・定^{じょう}・恵^えの三^{さん}学^{がく}の器^{うつわ}にあらず

——法然上人御法語より——

大河を向岸へ渡りたいのだけれど、
橋もなければ舟もない、急流なので
泳ぎきることできない。それでも、
どうしても渡りたい。どうしたら良
いのだろう、こちら岸をウロウロ歩
きまわっているのが、私たちの姿で
あります。そして何と、あの法然上
人でさえ、私たちと同じように、戒
律も禅も学問もできない自らだと言
っておられます。

人は、人であることだけで、すで
に悲しいのです。何もできない、自
分の心一つもきめかねるあわれな人
間、ほんとうにちっぽけであわれな
存在だ——と心底から気づいたとき、
天から一すじの糸が下りてくるので
はないでしょうか……悲しみの私た
ちを向岸へ渡してくださる念仏の糸
が——。



融通念仏縁起(重文)

彌陀^{みだ}たのむ人^{ひと}は雨夜^{あまよ}の月^{つき}なれや
雲^{くも}晴^はれねども西^{にし}にこそゆけ

——法然上人御詠——

ある旅行で初めてジェット機に乗りました。その日は曇りの天気で、下界から眺めていると全く太陽の光りは見えません。

空港を飛び立ってしばらく、高度二、三千メートルで急に窓辺が明るくなり、機外を見て「びっくり」。雲海の上を飛ぶ景色は、青い澄み切った空とキラキラ輝く太陽の光り。極楽浄土はこれだと思ふ程の光景です。

阿弥陀さまの慈悲の光りは「雨夜の月」と同じで、我々凡夫には中々見えないけれど、本願を信じて念仏の生活を送るべきです。

暗い、悲しいと嘆く人よ、さあ心の窓を開きなさい。太陽はすでに輝いているのです。

総本山 永観堂禅林寺



十 界 図

阿彌陀仏と十こえとなへてまどらまん

ながきねむりになりもこそすれ

法然上人御歌

取り越し苦勞をすることを「杞憂」といいます。これは昔中国の杞の国の人が、天が崩れて落ちるのではないかと心配して、何も手につかなかったという故事に基いています。

私たちも似たような経験をしたことがあります。このまま目をして眠ってしまったら、そのまま死んでしまふのではないか……。そんなことを考えたら眠るどころではありません。

法然上人は、お念仏を十声もとなえて眠れば、そのまま死んでしまつたつていいじゃないかと詠んでおられます。どうして、そのまま死んでもいいのでしょうか。——まちがいなくお浄土に往生できるからなのです。

総本山 永観堂禪林寺



十界図（部分）重文

煩惱具足の我等なれば、つねに煩惱は
 おこるなり。おこれども煩惱をば心の
 客人とし、念仏をば心の主人とすべし。

——法然上人ご法語より——

他人の幸福な姿を見て素直に喜べず、不幸になればひそかに喜んでい
 る——それが私たちの本来の姿であ
 るなら、なんと悲しいことではあり
 ませんか。うそ、いつわりの生きか
 た、つきあいがお互いを変によそよ
 そしくし、つめたく、ギスギスした
 毎日になっているのです。人間は誰で
 もそうなのだからと自己弁護し、ま
 あまあとという生き方では正しい人生
 の理解は生まれそうにありません。

どうせ人間は、生きている限りい
 やでも人とまじわっていかねばなら
 ないのだから、うらみやにくしみを
 抱いてクヨクヨするより、念仏の信
 仰をいただいて、すがすがしい生き
 かたをしたいものです。ちようど泥
 の中に咲く白蓮華のように。

阿弥陀仏は悪業の衆生を救わんために、生死の大海に弘誓くせの船をうかべ給える也たとへば重き石、かるき麻がらを一つ船に入れて向岸に届くが如し

和語燈録卷二より



十界図(部分)重文

念仏の教の根底にあるのは「平等」の思想であることはまことに有難いものです。

難しい修行をした人だけが救われるのでは不平等です。念仏を何万辺も申した人だけが往生出来るのでは不平等です。

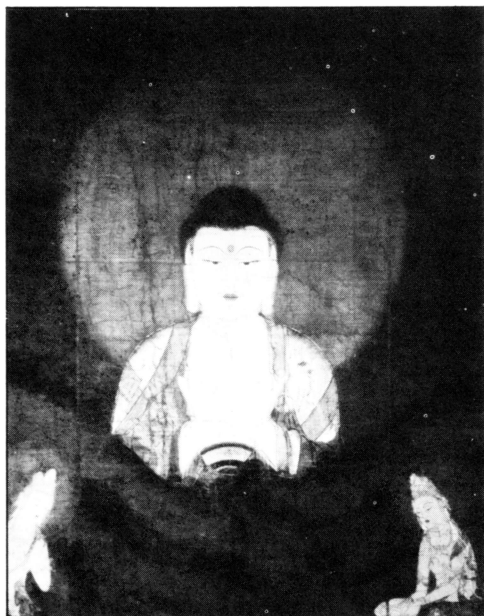
重い石もかるい麻がらも一緒に渡して下さる教が阿弥陀様の教です。

いやむしろ悪業の衆生——悪い事ばかりしてかす弱虫の私達——

こそがこの船の正客なのです。

だから誰もが安心して乗っていられるのではないでしょうか。

総本山 永観堂禅林寺



山越阿弥陀図（国宝）

昨日^{きのう}もいたずらにくれぬ。今日もまた
むなしくあけぬ。いまいくたびかくらし、
いくたびかあかさんとする。

——法然上人ご法語（登山状）

念仏の信仰に生きたM師は、紙に「於
摩江毛志努曾」の一語を書いて弟子に与
え、弟子はそれを仏壇の横にはっておい
て、朝夕この言葉を胸の中に叩きこんだ
そうです。

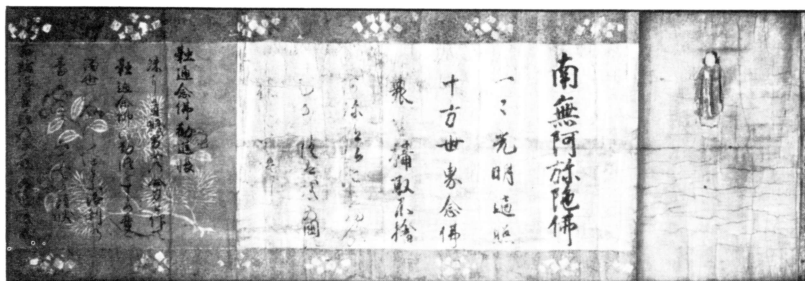
醉生夢死——親が死んでも、子供が死
んでも、おれはまだ死ぬはずはない、も
っと生きれるはずだなどと思いこんでい
るうちに、ひょっこり病氣になり、こん
なはずではなかったと、もがきながら死
んでゆく——。そんな中途半端な人生
を送っている私たちに、法然上人のこの
ご法語は、「お前も死ぬぞ」との警告でも
あるのです。

山本有三さんの詩にいわく、
「たった一人しかない／自分を
たった一度しかない／人生を／
ほんとうに生かせなかつたら／人間
に生まれてきた／甲斐がないじゃな
いか」と。

今日もあなたは空しく過ごすのですか？

総本山 永観堂禅林寺

みかえり 第15号



後崇光院宸翰 融通念仏勸進帳

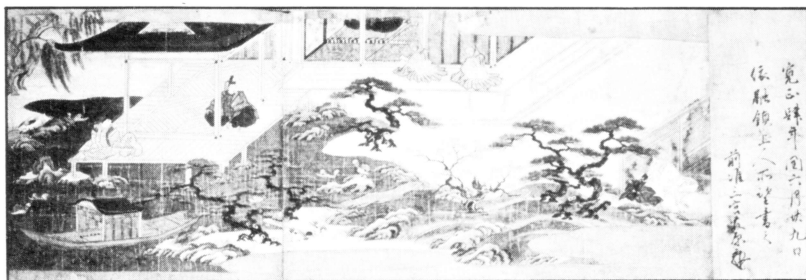
「わが名号みょうごうを念ねんぜん者ものわが浄土じょうどに生まれずば、正覚しょうかくをとらじ」と誓ちかいて、すでに正覚しょうかくをなりたまえるゆえに、この名号みょうごうを称とめる者は必ず往生おうじやうするなり。

——法然上人御法語より——

私たちのように、煩惱ぼんごうの赴おもむくままに生活くわつしている身みというのは、ただただ深重しんじゆうの罪惡ざいごを作りだすだけであって、三世さんぜの諸仏しよぶつからも十方じふぱうの如来にょらいからも「度どしがたし」と見捨みすてられる、そういう存在そんざいです。

ところが阿弥陀仏あみだぶつは、まさにそういう私たちを救すくえとらぬ限り、決して仏ぶつの位ゐにはつかぬ、と誓ちかわれて仏ぶつとなられた方かたなのです。ここに私たちは煩惱具足ぼんごうぐそくの身のままで、往生おうじやうが定さだまっていますのです。ですから、わが身の至いたらなきをとにかく考かんえるのは要いらぬ心配しんぱいです。要いは、「往生おうじやううたがいなし」と深く思おもい入いれて「南無阿弥陀仏なんぶあみだぶつ」と称とえることなのです。

みかえり 第16号



融通念仏縁起（伝土佐光信筆）

「ほとけの本願をば疑わねども、わが心の悪ければ往生はかなわじと申しあいたるが、やがて本願を疑うにて侍るなり」

——「和語燈録」——法然上人御法語——より——

「下衆の勘ぐり」という言葉があります。

私たちは、何の知識もなくても、心の奥では自分の心がいかにも悪いかということだけは、トコトン身にしてみえて知っているものではないでしょうか？ そんな悪い心の自分を、救って下さるような本願（阿弥陀様の教え）があるとは、とても信じられない。だから阿弥陀様までも信じられなくなってしまう——要するに「下衆の勘ぐり」に陥ってしまうのです。

下衆は下衆だからこそ、悪い心は悪い心だからこそ、そっくりそのまま、抱きあげて下さる本願を、実在するものとして信ずることができたなら、どんなに落ちつくでしょう？ どんなに幸せでしょう？ そして、どうしてそれができないのでしょうか？

ほとけは

一切衆生をあはれみて

よきをも、あしきをも、

渡し給へども

善人を見ては

よろこび、悪人を見ては

かなしみ給へる也。

——法然上人ご法語——



来迎阿弥陀如来像（重要文化財）

阿弥陀仏は「すべての人々を救おう」

という願をたてられた。そしてその願は満たされた。だから私達は南無阿弥陀仏とみ名を称えたならば必ず救われるのです。勿論、善人であつても、悪人であつてもそれは変わりありません。「私は本当に善人だ」と自信をもって言える人はありましようか？

しかし、悪人であつても善を行うことはできます。

それでは、善とは……？

悪とは……？

善とは、後味のよいこと。

悪とは、後味の悪いこと。

このようには考えられないでしょうか？